

事例 33

タイトル：家に帰ると訴え歩き始めるが転倒の危険が高い

・ <事例の状況>

空いた時間があると家に帰ることを思い出し、「かあちゃんが待っているから。」と言って施設内を歩き始める。しかし高齢のため下肢筋力が低下しており、バランスも崩しやすいため転倒の危険が高い。できるだけ手をつないだり近くで見守りをしたりしているが、自立心が強く「一人で帰れる」と思っているため、職員がそばについているとストレスを感じることもある。

・ <この事例で課題と感じている点>

職員はAさんの思いを尊重して関わりたいと思っているが、歩行状態が非常に不安定なためどうしても近くでの見守りは必要。しかしAさんとしては過剰に付き添われることはストレスとなる。また、他の入居者の介護やその他の業務と重なると、常に安全な範囲で見守ることは難しいという問題もある。

・ <キーワード>

転倒。 家に帰りたい。 自立心。

・ <事例概要>

【年齢】 90歳代半ば

【性別】 女性

【職歴】 専業主婦

【家族構成】 一人暮らし

【認知機能】 HDS - R 1点

【要介護状態区分】 要介護 4

【認知症高齢者の日常生活自立度】 a

【既往歴】 老人性認知症、うっ血性心不全、喘息

【現病】 老人性認知症、うっ血性心不全、喘息

【服用薬】 テオドール錠（気管支拡張）スペリア錠（去痰）真武湯エキス顆粒（新陳代謝改善）カルフィーナ錠（ビタミンD補給）プレタール錠（血栓予防）

【コミュニケーション能力】 あいさつのような日常的な会話や、「立って下さい」「食べてください」などの基本的な動作については声かけで理解できる。それ以上の複雑な会話の場合には「わからない」と答えることが多い。

【性格・気質】 自立心が強く芯が強い。前向きで他人への思いやりもある。

【A D L】 食事：見守り 排泄：一部介助 入浴：一部介助 着脱：一部介助

【障害老人自立度】 A 2

【生きがい・趣味】 母親に会うこと（母親は死亡している）、子供のころの思い出話。

【生活歴】 生まれてから高齢になるまでずっと同じ町で育つ。学生時代は勉強も運動もと

でも楽しく幸せだった。しかし結婚後早くに夫を戦争で亡くし、子供を女手一つで育てたため大変苦労した。その際に自分の母親がとても力になってくれた。子供が独立してからは一人暮らし。自分のことは自分でやってきた。

80歳代半ばより物忘れが目立ち始め、介護保険のサービス利用を開始する。

【人間関係】 自分から積極的に話しかけることは少ないが、職員に笑顔で話しかけると喜ぶ。Aさんが納得のいかない場合ははっきりと自分の意見を主張する。

【本人の意向】 母親が待っているから家に帰りたい（母親は死亡している）

【事例の発生場所】 認知症グループホーム（認知症対応型共同生活介護）